



ニュースレター

若手研究交流会 2024 開催報告

Report of the Young Researchers Meeting 2024

渡辺泰士^{1,2}、桑原佑典^{3,4}、木野佳音⁴、佐久間杏樹²
Yasuto Watanabe^{1,2}, Yusuke Kuwahara^{3,4}, Kanon Kino⁴, Aki
Sakuma²

2025 年 4 月 5 日受付. 2025 年 7 月 28 日受理.

1. 国立研究開発法人国立環境研究所 (yasuto.watanabe.wess@gmail.com)
2. 東京大学大学院理学系研究科
3. 関西学院大学生命環境学部
4. 東京大学大学院工学系研究科

はじめに

地球環境史学会 2024 年度年会の翌日の 2024 年 12 月 1 日に東京大学大学院工学系研究科において若手研究交流会を開催した。本稿ではその開催報告およびアンケート結果の報告を行う。

事前準備

2023 年度の地球環境史学会年会の前日に、若手研究交流会（松本他、2024）が開催され好評だったことを受け、2024 年度においても年会に合わせて若手研究交流会を開催した。本来は年会前日に行う方が年会期間中の情報交換が促進されるため望ましいと思われるが、今回は年会が金曜日から土曜日にかけての開催であったため、遠隔地の学生が授業を避けて参加しやすい年会翌日の日曜日に開催し、年会終了後の土曜日の夜に交歓会を行うことにした。若手研究交流会の終了時刻は遠隔地からの参加者の移動時間を考慮し、15 時とした。

今回は年会が研究所での開催で、休日に年会とは別に利用申請を行う負担が大きいことが予想されることと、開催地に所属する研究者から世話人を何人かにお願いすることが難しいという事情があった。このため、2024 年度の若手会は東京大学大学院工学系研究科（本郷キャンパス）で開催した。世話人の間で以上の方針を固め動き始めたのが 8 月上旬ごろだった。

その後、9 月ごろまでには実施する企画内容を固めた。昨年度の若手研究交流会のアンケート結果より、実施した各企画はどれも好評であったことから、今回も前回に

倅い自己紹介、キャリアパスレクチャー、ラボツアー、グループワークという構成とした。ラボツアーでは、東京大学大学院工学系研究科の加藤・中村・安川研究室を訪問することになった。さらに、今回の開催地である東京大学大学院工学系研究科に併設された鉱物資源フロンティアミュージアム「ミネラフロント」の見学を行うこととなった。同施設は当時、世話人（桑原）が管理に携わっていたため、本来閉館日である日曜日に見学することができた。

キャリアパスレクチャーの依頼は 9 月下旬ごろから順次行った。今回は、東京大学大気海洋研究所・准教授の高木悠花先生、国立極地研究所共同研究推進系・助教の大藪幾美先生、千葉大学国際高等研究基幹・環境リモートセンシング研究センター・准教授の岡崎淳史先生にご講演いただける運びとなった。以上について、早い段階で動き方針を固めることができたことはその後の円滑な準備につながった。最終的な若手研究交流会の日程は以下の通りである。

-
- 11 月 30 日（土曜日）若手前日交歓会
 - 12 月 1 日（日曜日）若手研究交流会
 - 09:00-09:30 参加者自己紹介
 - 09:30-11:00 キャリアパスレクチャー
 - 11:00-11:40 ラボツアー & 「ミネラフロント」見学
 - 11:40-13:00 昼食（各自）
 - 13:00-15:00 グループワーク

参加登録の案内は、8 月下旬には概要とともに地球環境史学会メーリングリストに投稿した。その後、10 月中旬までには詳細なスケジュールとともにリマインドメールを投稿した。駆け込み参加も含めた最終的な参加者数は、若手前日交歓会が 24 名、若手研究交流会が 27 名（キャリアパスレクチャー講演者含む）となった（図 1）。



図 1. 若手研究交流会 2024 の参加者集合写真。

若手研究交流会当日

若手研究交流会当日の朝に会場の準備を行った。集合時間が午前 9 時と、年会開催地の東京都立川市からの移動を考えると少々早めの時間設定だったが、定刻にはすべての参加予定者が到着し、無事スケジュール通りに始めることができた。会の趣旨説明の後、参加者それぞれに簡単な自己紹介を行ってもらった。

その次に、キャリアパスレクチャーの講演を行った。1 人目の講演者の高木先生には、学生時代のテーマ選びのきっかけからその後の進路についてはもちろん、ライフイベントと研究教育活動の両立のご経験やそのための有益な情報をご教示いただいた。2 人目の講演者の大藪先生には、アイスコア分析の専門家としてのキャリアパスを歩まれる中で考えてこられたことについて、南極やグリーンランドでのご経験も交えてお話しいただいた。3 人目の講演者の岡崎先生には、学生時代からの気候モデルを用いた研究のご経験や海外での体験談、国内外の研究職への応募などのご経験などについてもお話しいただいた。それぞれのご講演はおおよそ 20-30 分程度という大雑把な時間指定のみを行い、厳密なタイムキープは行わなかった。それぞれのご講演の後には質問の時間を設けた。どの講演に対しても多くの質問が挙がり、たいへん実りのある時間であった。第一線でご活躍されている近い世代の研究者の方々のキャリアとともに移りゆく考え方や、それぞれの人生観に触れる機会となり、きわめて良い経験となった。

キャリアパスレクチャーののち、参加者を 2 グループに分けて入れ替え制で加藤・中村・安川研究室のラボツアーと「ミネラフロント」の見学を行った。ラボツアーでは、化学組成分析に用いる蛍光 X 線分析装置や ICP 質量分析装置、およびレーザーアブレーションシステムを見学し、世話人（桑原）による概要説明が行われた。「ミネラフロント」では、マンガンノジュールやレアアース泥をはじめとする海底鉱物資源の展示のほか、国内の陸上金属鉱床から産出した多数の鉱物標本の展示を見学した。

午後にはグループディスカッションを行った。2023 年度の若手研究交流会で行ったグループディスカッションでは、はじめは近い座席の参加者同士で班を組み議論を行ったのち、専門性などのある程度考慮した班に分け直した上で「地質・分析・モデル・古生物の研究者の共同研究がなぜ重要？」「このメンバーでどんな共同研究ができそう？」というトークテーマで、合計約 1 時間の枠で議論を行った(松本他, 2024)。昨年度の反省点として、特に後半で班を組み替えた後に、改めて自己紹介に時間がかかり、議論の内容についても想像以上に活発に議論が行われたためかなり時間が短く感じられたことなどが挙げられた。そこで、今回は自己紹介の時間を十分に確保しお互いの専門性を認識した上で次の議論のトピックにそのまま移行できたら、より会話が盛り上がるのではないかと考えた。このため今回はグループディスカッションの時間を 2 時間と十分に確保し、班分けは事前に世話人側で設定した 6-7 人の班で固定し組み替えないことにした。各班には世話人が一人ずつ入り、議論の活性化を促しながらタイムキープする役割を担うこととした。また、今回は、各班で議論した内容のメモを Google スライド上にまとめてもらい、最後に簡単に各班からメモを見ながらどのような話をしたかを報告してもらうことにした。これは、2 時間という時間があっても、議論した内容をまとめた内容に整理することは時間的に困難であることが予想

されたためである。2 時間という定められた時間の中でどのようなアウトプットが必要とされて、いかなるゴールが設定されているかをあらかじめ示すことで、最低限抑えてほしいポイントを明確にしつつ、議論の自由度を確保することを狙った。

グループディスカッションのトピックを設定するにあたり、今回の交流会では学部生や修士課程の学生も参加するため、研究を始めたばかりで自分の引き出しを持たない参加者についても会話に入ることができるようなテーマ選びが重要と考えた。そのようなテーマ設定で、かつ 2 時間の枠の中で十分に話し合えるようなテーマとして、木野・渡辺 (2024) の事例を参考にしつつ、3 つのトピックを設定した。各班での自己紹介のあとの 1 つ目のトピックとして、「どんなことを研究でやってみたい？どのような研究者像が目標？」という内容について話してもらった。このトピックは、研究を始めて間もない学生でも気軽に話せるトピックとして設定した。2 つ目のトピックとしては、「古気候・古環境研究をやるうえで難しかったと思ったことや大変だったことは？」というテーマを設定した。このトピックは、誰でも持っている研究における日頃の悩みを共有して、参加者同士の共通点を探りつつ親睦を深めてもらうことを目的に設定した。最後の 3 つ目のトピックには、「古気候・古環境分野をより活性化していくためにはどんなことができるか？」という点について自由に話してもらった。これは、古気候・古環境業界の今後の発展を目指して、単なるアウトリーチに限らず、個人単位でどのようなことができるかについて広く議論してもらうことを目的として設定した。この最後のトピックでの議論を活性化するために、サブテーマとして「どのようにアウトリーチを行う？」、「どのように PALEO の周辺分野とコラボレーションできる？」、「予算獲得のためにはどんな工夫ができる？」、「どのような共同研究ができる？」といくつかの具体的なトークテーマも設定した。自己紹介とあわせて 4 つのトピックについて、約 20-30 分を目処に班毎の時間管理で議論した。最後の報告の時間は、各班数分で簡単にまとめて発表した。最終的には、グループディスカッションの時間が 2 時間を少し上回ってしまったが、おおむね円滑に実施することができた。各班の中で話す時間を長く確保することができたことで、班のメンバーそれぞれの研究や考え方について、より深く理解することができたように感じられた。

以上で本年度の若手研究会の内容を無事に終了することができた。昼休みや会の終了後の時間には、参加者間での研究にかかわる情報交換も密接に行われ、非常に良い研究交流の場になったのではないかと感じられた。

事後アンケート

本会の開催後には事後アンケートを行ったので、ここでその結果を報告する。全参加者の約半数にあたる 14 名にご回答いただいた。まず、「今回の若手会に参加されて、どう感じられましたか。」という設問に対しては、13 名が「非常に良かった」、1 名が「良かった」、と回答しており (図 2)、全体としてきわめて高い評価を得ることができたものと考えている。次に、「今回の若手研究会でとくに気に入ったセッションがあれば教えて下さい。」という設問に関しては、回答者 14 名中 13 名がキャリアアパスレクチャーについて気に入ったという結果となった点がとりわけ顕著であった (図 3)。

今回の若手会に参加されて、どう感じられましたか。

14 件の回答

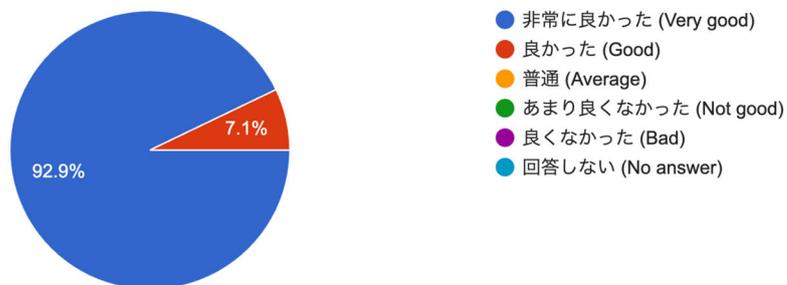


図 2. 若手研究交流会 2024 の事後アンケート「今回の若手会に参加されて、どう感じられましたか。」の集計結果。

今回の若手研究交流会でとくに気に入ったセッションがあれば教えてください。(複数回答可)

14 件の回答

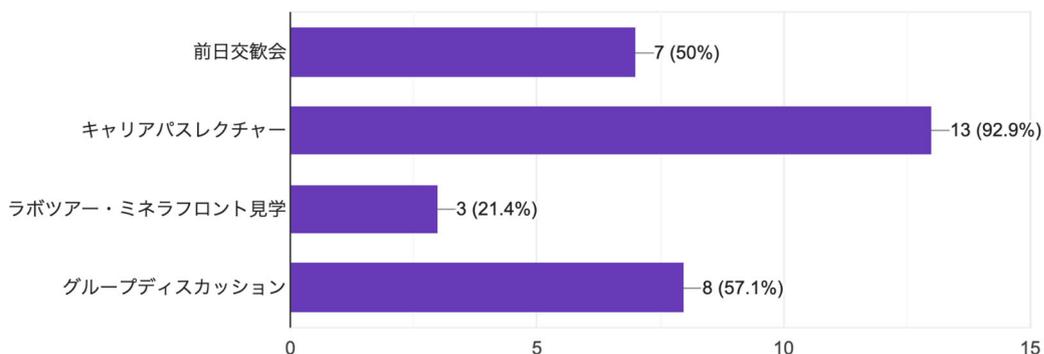


図 3. 若手研究交流会 2024 の事後アンケート「今回の若手研究交流会でとくに気に入ったセッションがあれば教えてください。」の集計結果。

次に、自由回答の設問の回答について下記にまとめる。まず「差し支えなければ、今回の若手会で良かった点やその理由について自由にご記入ください。」には、以下のようなコメントが寄せられた。

- ・ 交流がこれまでなかった人とグループディスカッションで話すことができた。またキャリアパスレクチャーでは具体的な過去に起きた悩みやその乗り越え方を共有してくださり、こんなすごい研究者の方でも同じような時期があることを改めて知ることができ、これからも頑張ろうと思えたこと。
- ・ 多数の先輩方のお話を聞いたことで、今後のキャリア選択の参考になりました。
- ・ 多様なキャリアを歩む研究者のお話を聞くことができた。

- ・キャリアパスレクチャーはみなさん聞きたい話だと思うので、ぜひ毎年いろいろな人の話が聞けると嬉しいと思いました。また、交歓会もいろいろな人と交流できる機会としてはよかったです。ラボツアーも自分の研究室を持つ身としては参考になる場所があってよかったです。グループディスカッションはテーマに対して時間が少し少ない感じもありましたが、いろいろな情報交換ができて非常に有意義でした。
- ・グループディスカッションの時間は割と自由に議論できて時間もたくさんあってよかった。
- ・博士課程以降の人生設計や現在の悩み等について先輩方に相談出来たため
- ・自分たちよりやや先輩の世代にあたる研究者から、キャリアパスについてのお話を聴く貴重な機会になったと思う。
- ・特に、研究者生活において大変だったこと、辛かったことも含めてお話くださったのは、自分にとって非常に参考になった。
- ・他大学の研究者の方や学生の方と交流できてとても楽しく、今後の参考になった。
- ・様々な年代の方と、また同じ Paleo 研究でもその中の様々な分野の方たちと話すことができる機会となったことがとてもありがたかった。
- ・トップを走る先輩たちが研究にどう取り組んでいるかを聞いて、大変勉強になりました。
- ・キャリアパスレクチャーが非常に面白かった。複数人の話が聞けたため、自分にもできそうな点を見つけることができた。また、高木先生の発表において、研究活動と私生活について平行して聞くことができ、良かった。

以上のコメントからも、キャリアパスレクチャーやグループディスカッションの内容について、意図していた効果が得られたことが伺えた。次に、「差し支えなければ、今回の若手会で改善すべきだと思った点や、今後若手会を開催する場合に取り入れると良いこと、やってみたいことがあれば、自由にご記入ください。」には、以下のようなコメントが寄せられた。

-
- ・2 日目の会場が学会発表の会場から離れていたこと。前日に飲み会があったため、10 時開始とかにしてけると嬉しいです。
 - ・学生やポスドクにとって、進路相談や就職相談が気軽にできる機会があると良いかなと思います。今回の交流会の自由時間でも相談できていると思いますが、より積極的な機会を設けてはどうかと（話したがっている／悩んでいる人もいそうだったので）。
 - ・帰宅することを考えて、交歓会を前日に開催したのだと思うのですが、若手会で仲良くなった人たちと話すことができる機会という意味では、若手会の後であってもよいのかなと思いました。キャリアパスレクチャーに限らず、研究者の人生の経験の話はためになることが多いので、海外経験や乗船経験、調査経験などを掘り下げような話なども企画としては良いのではないかと思います。

- ・キャリアパスについて幅広く知りたい
- ・開始時間 (9:00) が少し早かったかもしれない。
- ・若手会の有志で巡検をやってもよいかも？ (準備が大変かもですが...)
- ・特にありません。強いてあげるなら、ラボツアーの際に、研究室の学生と話す機会があれば、より学生間での交流が深まると思った。

以上のコメントからも、若手研究交流会の開始時刻については改善の余地があったことがわかる。様々な参加者にとって参加しやすい開催時間の設定は、今後このような会を企画する度に工夫していくことが重要であろうと考えられる。また、そのような場合の企画設定において有益なご意見も多くいただいたので、今後若手研究交流会を開催する際に検討できればよいと考えられる。最後に、「その他、何かあれば自由にご記入ください。」には、以下のようなコメントが寄せられた。

-
- ・若手会の開催・企画をしてくださり、ありがとうございました。
 - ・運営のみなさまのおかげで今回も有意義で楽しい会になったと思います。来年もぜひ参加したいと思いますので、よろしくお願いします。
 - ・幹事お疲れ様でした！
 - ・主催側の方たちのおかげでスムーズに、楽しい交流会が行えて非常に良かったです！ありがとうございました！
 - ・特にありません。

おわりに

総括として、前年にはじめて開催した若手研究交流会の企画のフォーマットをもとに改善することで、充実感のある体験を提供することができ、多くの参加者に満足いただける会を実現することができたのではないかと考えている。こうした取り組みは、参加者の将来の進路決定などにも有益な情報を提供することはもちろんのこと、より長期的な視点でも、人脈形成を促すことで今後の円滑な情報交換や将来的な共同研究の促進が期待できる。こうした取り組みの繰り返しが学生や若手研究者の今後の研究活動、さらには古気候古環境分野の発展においてもよい相乗効果を生むはずであり、そのような機会提供を今後も定期的に継続できることが望ましいだろう。また、今回は若手研究交流会を年会後の日曜日に開催したが、2023 年度のように年会前に若手会を開催できれば、若手どうしでの交流や続く年会での議論のさらなる活性化が期待されることから、それが望ましい形態であったかもしれない。今後は、若手会にどのような機能が求められているのかを丁寧に検討しながら、より効果的な運営を行うことが望ましいだろう。

謝辞

本会開催にあたり、大藪幾美さん、岡崎淳史さん、高木悠花さんには、ご多忙の中キャリアパスレクチャーをご準備いただいた。村井登紀子さんには事前準備にご助力いただいた。この場を借りて以上の方々に感謝を述べたい。

引用文献

木野佳音, 渡辺泰士 (2024) 若手のための「古気候モデリング研究集会 2024」実施報告, PALEO, 12(1), 1-10

松本廣直, 渡辺泰士, 小坂由紀子, 樋口太郎, 市村駿汰, 高橋聡 (2024) 若手研究交流会開催報告, PALEO, 12(2), 11-16